

あきらめない、こだわらない、ぶれない

卒業生の皆さん、本日はおめでとうございます。また、ご来席の保護者の皆さま、本日はさぞ晴れがましいお気持ちだと思います。心よりお慶びを申し上げます。

入学から卒業までの4年間

学長になってから、こうして、高いところから式辞を述べるのも8回目になりますが、その記念すべき第1回目は2008年の4月、皆さんの多くがこの大学に来たときの入学式でした。

その意味で、皆さんは私にとって特別の存在だということになります。言わば、一緒に苦労しながらここまでやってきたという「仲間」のような気持ちがあります。

その皆さんがもう卒業を迎えるのだということで、長いようで短かったこの4年間だと思います。皆さんにとってはどうだったでしょうか。いろいろあったけれども、楽しかった4年間だと思ってもらえると嬉しいと思います。

震災と学業

皆さんの多くが5歳のころ、阪神淡路大震災が起きました。まだ小さくてそのころのことをよく覚えていないかもしれませんが、それから16年たって、去年、皆さんが大学を卒業する前の年に東日本大震災が起きました。幼稚園から大学まで、学業の初めと終わりが大震災の年であったということに不思議な運命的なものを感じます。

社会に出ること

それでも大学の4年間はおおむね平穏にすごせたのではないかと思います。もちろん、長引く不況でなかなか進路が決まらず、就職活動が大変だったということもあったでしょう。でも、外の社会に比べれば、大学というところは居心地のよい、保護されたところだったと言えると思います。脅すわけではありませんが、守備よく就職先が決まった人は、4月からおそらくずっと大変な経験をすることになるのではないのでしょうか。

この中で、4年前の入学式のときにした話を覚えている人はいるでしょうか？ 4年前は、ある日本の大企業の外国人の社長さんが、「大学で勉強することなんて、所詮、会社から見たらすぐに役に立つようなものではなく、会社に入ってから新たに学ぶことになる。だったら、大学では、学び方を学んできてほしい」と言っているという話をしました。

もちろん大学で学んだ専門的な知識も社会に出て役に立つことが多いとは思いますが、現実の社会での日進月歩の変化に比べたら、大学で学んだことがそのままの形で役に立つということは考えにくいと思います。むしろ、働くようになってから、自分のもっている知識を状況に応じて適切に変更していくという「しなやかさ」が社会からは求められると思います。そのために、大学では学ぶことを楽しんで、「仕事・勉強」という意味の英語のworkに引っかけて、学んだ結果得られることにワクワクする気持ちをもって下さい、というようなことを言いました。

こだわらないこと

去年の卒業生には式辞で「こだわり」を捨ててはどうか、ということを言いました。「こだわり」というのは、最近ではよい意味で使うことも多いのですが、ここでは、つまらないことへの「こだわり」です。例えば、指を組むときにどちらの親指が上にくるか、というようなことです。確かに逆にすると気持ちが悪いけれど、所詮その程度のことなのではないか、というようなことを言いました。

AKB 3 原則

今年はそれをもう少し発展させてみたいと思います。しばらく前に「断捨離」という言葉がはやりました。断ち、捨て、離れるということですね。今までのしがらみから自由になろうということではないかと思います。これにならって、3つの捨てたいものをあげたいと思います。

1つ目は「あきらめ」です。何か目標を立てたら簡単にあきらめない。簡単にあきらめることが癖のようになってしまっは、何事もうまく行きません。

2つ目は去年も言った「こだわり」です。つまらないことにこだわることでいかに多くのものを失なうことになるのかということを考えてみて下さい。こだわりを捨てることが自分も他人も幸せにすることになるのだと考えて下さい。

3つ目は「ぶれ」です。首尾一貫していてぶれないこと。へらへらと人の言うままに、右に左に揺れていては、誰からも信じてもらえなくなります。

(ちなみに、この3つの頭文字をとると、たまたま——たまたまですよ——A、K、Bになるので、これをAKB 3原則と呼ぶことにしました。ゆくゆくは48原則くらいまでいきたいと思っています。)

この3つは、実は、よく考えると矛盾することを含んでいます。「あきらめない」ということは頑固でこだわることになりかねません。また、「こだわらない」ということは、すぐに考えを変えてしまっはぶれることにも通じます。だから、「あきらめない」けれども「こだわらない」、「こだわらない」けれども「ぶれない」、という微妙なバランス感覚を必要とします。どれに重点を置くかは人それぞれであってもよいと思います。自分なりのバランス感覚を磨いて下さい。

あきらめなかった結婚式

最後に、あきらめないことの大切さを物語る例として、去年、皆さんの中の多くの人もお手伝いしてくれてできた、学生の企画による結婚式をあげたいと思います。

去年一年間、東日本大震災に関しては、様々な取り組みがなされてきました。皆さんの中には、直接現地に行った人もいるでしょう。もともと実家が東北だったという人もいます。現地に行ってボランティア活動はできなかったけれど、募金をしたり、毎月11日前後に開いていたお祈りの会に出てきて被災地のことを考えた人もいると思います。

私たちの大学は、男子学生もいる大規模な大学ではないため、大勢のボランティアを派遣することもむずかしく、それなりに自分たちにできることを模索してきました。同じ震災の被災地の神戸にあるキリスト教主義の女子大学としてできることを。

そのような活動の一つとして、福島のカップルを招待して挙げた結婚式がありました。

式直前に震災に合い、一度は結婚式をあきらめかけていた佐久間さん夫妻が、あきらめず、遠い神戸の地ということにもこだわらず、初心を貫ぬき通しました。また、お手伝いした学生たちも、「本当に学生たちの手でこんなことができるのだろうか」と不安に思ったときもあったかもしれませんが、あきらめずに、とてもよい結婚式を実現させてくれました。

私たちにできたことは、ごくささやかなことだったかもしれませんが、振り返ってみれば、周りの多くの人に、こんな形でも社会に貢献できるのだという印象を与えることができたのではないかと思います。

佐久間さん夫妻が、大きな風船に載せて、皆さんにお祝いの電報を寄せてくれました。風船はチャペルの前あたりに置かれていると思いますので、後で見てください。この電報を紹介してこの式辞を終えることにしたいと思います。

神戸松蔭女子学院大学卒業生の皆様

ご卒業を祝し、心からお喜び申し上げます。春うらかな今日の佳き日、学び舎を巣立つみなさんの未来に幸多かれとお祈りいたします。

福島県郡山市
佐久間善秀・博子

皆さん、もう一度、卒業おめでとう。そして、私たちも、皆さんに教職員として接することができたことに感謝したいと思います。ここをホームだと思って、いつでも帰ってきて下さい。